



Title	状態変化動詞の意味構造
Author(s)	沖田, 知子
Citation	Osaka Literary Review. 1976, 15, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

状態変化動詞の意味構造

沖 田 知 子

1. はじめに

時間的にも空間的にも連続体である現実界にあって、人間は言語によって、再構成、認識をする。しかし、現実界が無限の拡がりをもつのに比し、その認識の具たる言語は有限で、人間はその形式に拘束されつつも、現実界を有意の束で切りとって言語化を行う。この際、非連続の言語を連続の現実界にどれだけ近づけうるかという specificity の程度が問題となるが、一般には抽象化に便る。連続体という大前提の下でこそ、線と点、無変化と有変化、即ち状態と変化という対照的概念が生じるのであり、このような変化の意味を担うのも動詞の意味機能の一つであろう。ここでは特に、或る状態から他の状態への変化を示す状態変化の動詞をとりあげ、その意味構造にどの様に状態変化という概念が含まれるのかを考えてゆく。その際、実際の文に於いてその伝えんとする情報（新情報）と、既に知っている情報（旧情報）⁽¹⁾との対立を明らかにできるのは、聴者の立場からであるとする Öim (1973) に拠って、文のもつ意味を聴者の意識におこる変化として捉えてゆく。この聴者の知識に生ずる変化の指示を直接具現したものが、動詞の意味内容たる predicate であり、その働きに依り話題となるものの nominal elements である argument が修正をうけることとなる。意味構造から表層構造表示への変形ではなく、逆に聴者の意識内に於ける修正の形で、presupposition, assertion、或いは新情報、旧情報等⁽²⁾をくみこんだ動詞のより深い意味構造の呈示を試みたい。

2. 状態変化

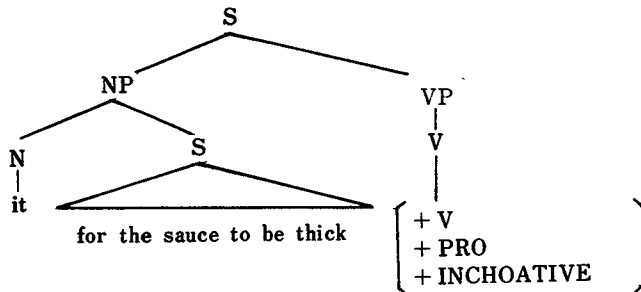
状態変化は、変化する前の状態と変化した後の状態という少なくとも2種類の状態（加藤(1974)に倣い、各々変化前状態と変化後状態と呼ぶ）と、⁽⁴⁾

状態変化動詞の意味構造

(5)
それを仲介する変化点とから構成される。変化後状態は、変化の影響をうけた状態、即ち変化の結果であり、変化前状態と変化点の後に継起する。

2.1. 変化後状態

- (1) The sauce is thick.
- (2) The sauce thickened.
- (3) The sauce became thick.
- (4) The sauce came to be thick.
- (5)



(6)
Lakoff (1968, 1970) では、(2)~(4)は変形によって関係づけられていて、その基底構造は(5)で表示される様に基本的には同一であるとし、更にその構造内に(1)を埋めこんでいる。(1)は(2)~(4)の変化後状態即ち変化の結果生じた状態に他ならない。この変化の動詞の研究で重要なのは、基底構造に変化後状態をくみこみ、更に実際の動詞の代わりに inchoative pro-verb を導入している点である。

(7)
Lakoff のいう変化の動詞を更に拡大援用したのが Kimball (1973) であろう。Lakoff のいう変化の動詞と ‘gradually’ との共起制限を破る動詞 *get* にも同様な分析を試みている。(6)が(7)の様な変化後状態（この場合 *have* で記述されている）が埋め込まれた基底構造をもつとしている。

- (6) Carol got a book.
- (7) [[Carol have a book]_S]_{NP} [come]_{VP}_S
- (8) *Carol gradually got a book.

2.2. 変化前状態

変化後状態だけでは、変化の記述には不十分であり、変化前状態と変化

後状態が対比されてこそはじめて変化が明示されうる。

(8)
Anderson (1968) では *learn* の分析で

(9) NP₁ not-know NP₂ (変化前状態)

Something Changed (変化点)

NP₁ know NP₂ (変化後状態)

(9)の様に、変化点 (Something Changed) の前後に、明解な肯否対立を示す変化前状態と変化後状態をそれぞれ配している。

(9)
Givón (1973) では、factive presupposition とは別種の、動詞の time-axis (action time) に関連する presupposition と implication を対峙させている。即ち、time-axis に先立つ時点での presupposition が変化前状態、time-axis 後の implication が変化後状態に相当する。

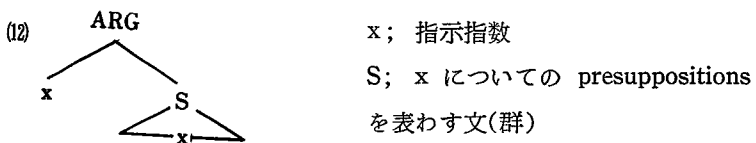
(10) Wyatt realized that Doc had tuberculosis.

(11) [[Wyatt NOT know that Doc had tuberculosis]_S came to
[Wyatt know that Doc had tuberculosis]_S]_S

つまり(10)は(11)の様な変化前状態から変化後状態への変化という形で表わされた意味構造をもち、その状態変化は肯否対立を示す2種の状態で明示されている。ここでの基礎となる状態は、状態動詞 *know* で記述されている。

2.3. identifying structure

聴者の立場から文の意味をみようとする場合、上述の様な方法では、変化前状態のみが presupposition として機能するという誤りを導きかねないという点で不充分である。即ち、聴者が identify する話題についての presuppositions の中では、変化前状態はその一部にすぎない。この意味において、Öim (1973) で提唱された identifying structure 即ち聴者の記憶における話題についての記述の一般形である argument 構造がかなり有効であろう。



identification に因り聴者の意識に喚起された旧情報と変化前状態を含む

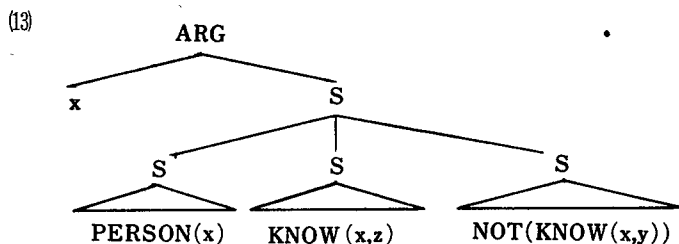
presuppositionsから成る修正前の identifying structure は、新情報を得ることにより、聴者の意識内で部分的（つまり変化前状態のみ）修正をうける。即ち、変化後状態が変化前状態の所に代入されて、旧情報と結びつき、新しい identifying structure が得られる。この対比的変化前後の状態の代入が状態変化を意味し、その機能は predicate に因と考えられる。従って、聴者は変化前状態を常に意識しているというよりは、むしろ変化を意義づけるための解読過程で変化前状態は不可欠の要素となる。

3. INCHOATIVE⁽¹⁰⁾

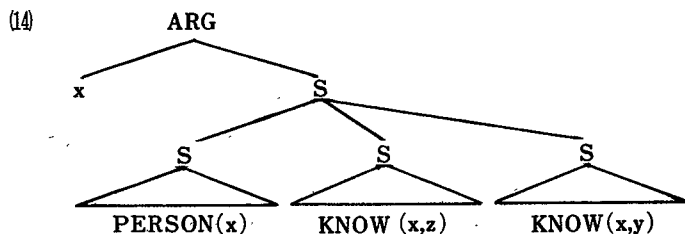
まず状態変化をみるのに有効な identifying structure を吟味して、より一般的な状態変化動詞の意味構造へと考えてゆく。

3.1. Õim (1973)

Õim は、*to understand* (=to come to know a definite fact) を選び、この predicate が発せられる前の x について聴者の知識を記述する identifying structure を⁽¹³⁾としている。

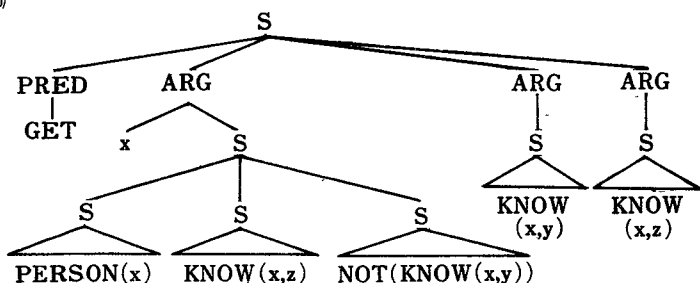


‘ x , who is a person, who knows z and who does not know y ’
 x についての presuppositions に変化前状態即ち NOT(KNOW(x , y)) が含まれていて、それが発話後、変化後状態に修正されて、⁽¹⁴⁾となる。



つまり、発話の結果として、(14)のような新しい identifying structure が獲得されたことになる。この(13)から(14)への変化は、聴者の意識に生じた変化に相当するので、これらの中間段階として(15)が考えられる。

(15)



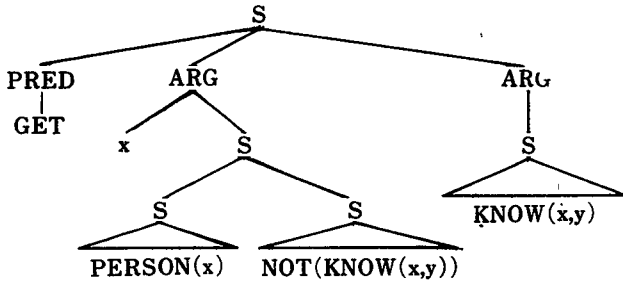
'*x*, who is a person, who knows *z* and who does not know *y*, gets the knowledge of *y* from his knowledge of *z*' を表わす predicate *to understand* に対応する構造である。更にこの assertion を具現するものとして elementary predicate GET が導入されている。このことはとりも直さず、Öim が(15)の様な predicative structure を動的なものと考えて、この predicate の機能は変化を直接具現すると考えている事を示している。逆にいえば、この様な動的な性質こそ動詞を動詞たらしめているものの一つであろう。

3.2. 修正案

ところで、Öim 自身も認める様に、(15)で左から3番目の argument が問題である。 z は、 y という知識を導き出す元となる情報で、換言すれば、identify されて聴者の意識にのぼることのできるものである。つまりは、 z は聴者にとっては旧情報に他ならない。従って presuppositions の中でも修正をうけない部分であり、当然それが修正をうけるべき部分である変化前状態と対等にとり扱われるべきものではない。むしろ必要とすれば、旧情報の一部もしくはその下位構成要素として扱うのが妥当であろう。然もその様な必要があるとすれば、実際の文中での処理の時であろう。つまり、状態変化の記述においては、必須というよりはむしろ、解読時での任意な要素といえよう。従って、(15)から z の関連事項を削除すると、第3

argument も削除できることとなり、また第1 argument 内でも presuppositions が修正されない部分とされる部分とに二分されることとなる。

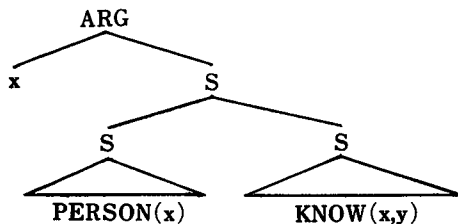
(16)



predicate *to understand* の修正された構造(16)では、第1 argument は旧情報と 変化前状態から成る presuppositions 即ち修正をうけない部分と いうける部分、第2 argument は変化後状態という新情報と性格づけられる 事になり、(15)より簡潔でしかも変化を明示する構造となる。この際便宜的に、*to understand* の旧情報は PERSON(x) で代表させておく。実際の文処理になると、更に他の旧情報もありこまれ複雑になる。z に関する記述も、もしあるならば、この段階で必要となろう。

elementary predicate GET は、第2 argumentの内容(即ち新情報である 変化後状態、具体的には KNOW(x, y))を第1 argumentの presuppositions の一部である変化前状態 NOT(KNOW(x, y)) に代入することであり、その後 PRED の GET と S を削除すると、その assertion の結果である最終的な聴者の x についての知識が得られることとなり、(17)の様に新 しく獲得した identifying structure となる。(14)と比較しても、assertion の効果即ち旧情報に新情報が付加されたということが(17)ではより明示的であらう。

(17)



3.3. INCHOATIVE

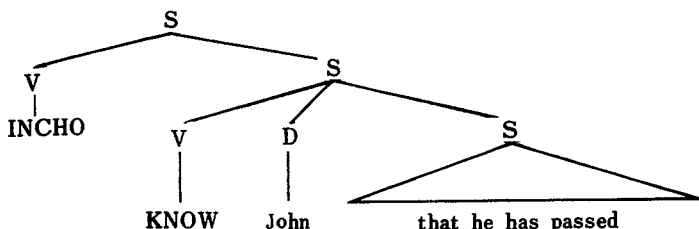
elementary predicate GET は、Lakoff (1968) の *come about, become, get, turn, grow* と同様の機能をもつと考えられるが、surface verb との混同を避けるためにも Lakoff (1970) の様に、inchoative pro-verb 即ち変化を示すより abstract なものの導入が必要であろう。ここでは、GET に代わる変化を具現する predicate として INCHOATIVE を設定する。こうすることにより、 $\tilde{O}im$ の提唱する構造をより一般的な状態変化動詞の適用にまで拡張されよう。例えば、もっと abstract な形で変化を担うとするなら、(18)の様に x が PERSON でなくて、無生物でも変化の構造記述は可能となる。

(11) 格文法においても、Lee (1973) では

(18) John knows that he has passed.

(19) John learned that he has passed.

(20)



learn を埋め込まれた文の main verb KNOW と母型文の main verb INCHO(ATIVE) とに分析し、(20)の様な基底構造を示している。ここでの、INCHO も $\tilde{O}im$ の GET と同様の機能即ち変化を支配するものと考えられる。しかも、(18)は(19)の変化後状態に相当する。しかしながら、(20)の様な構造では依然として状態変化が明示されているとは言い難い。

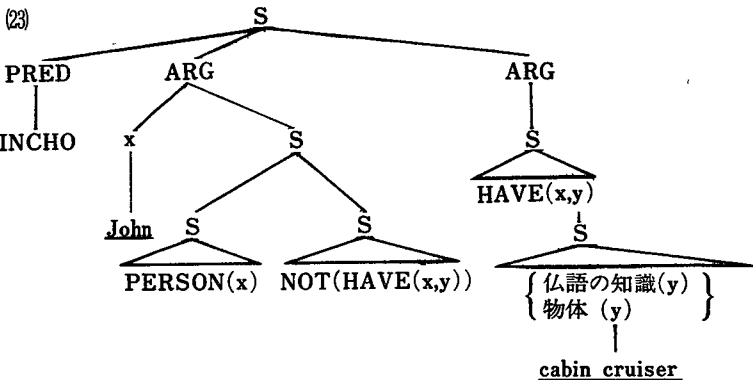
3.4. HAVE

変化の機能を担う pro-verb INCHOATIVE の導入に依り、*to understand* は新知識の獲得を意味する。この場合、埋め込まれた文 ' x know y ' は、 y の意味素性を〈知識〉と指定すれば、' x have y ' と書き換え可能となる。これは、*have* のもつ状態記述能力に注目したためで、更には HAVE

のとり目的語の位置に来るものの素性の指定に依って、INCHOATIVE をもつ動詞が拡大できることとなる。例えば、*y* が〈物体〉であれば *get*, *acquire* 等、〈性質〉なら *thicken*, *harden* 等、〈知識〉なら *understand*, *learn* 等になる。つまり、これらの動詞は、HAVE の目的語の位置に来る *y* 素性指定のレベルでは異なるものの、同様な ‘HAVE-situation’ をもつと考えられる。例えば、(21)と(22)は、(23)のような構造をもつと考えられる。

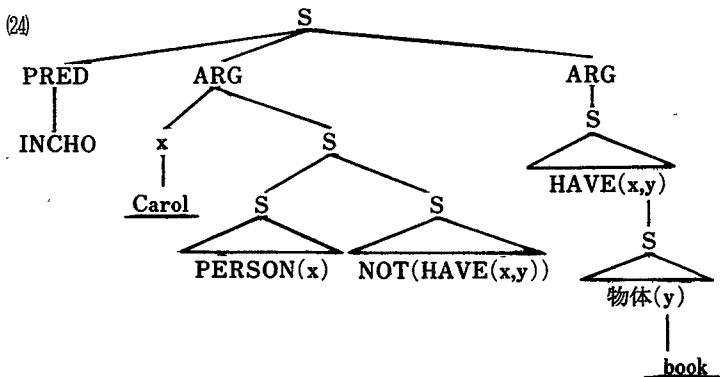
(21) John learned French.

(22) John acquired a cabin cruiser.



つまり、(21)と(22)は、それぞれ HAVE の目的語の位置に来る素性指定レベルが異なるだけの構造的類似性をもつ。このレベルでの違いは Fillmore (1968)⁽¹²⁾ のいう、動詞そのものの意味ではなく、そのとり argument に課す understandings のレベルでの処理に他ならない。更には、状態変化が absolute か relative かも、このレベルでの処理が可能となる。

(6)も(24)の様な構造をもつと考えられる。



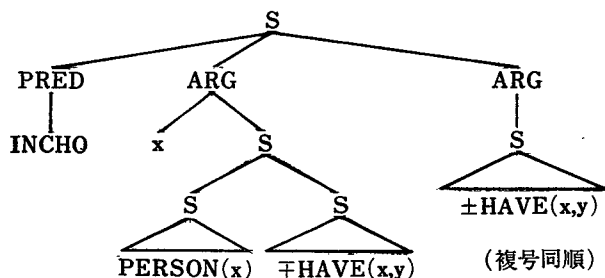
更に、*get* の反対動詞 *lose* の場合、

(25) Carol lost a book.

(26) [[Carol HAVE a book]_S INCHOATIVE [Carol NOT HAVE a book]_S]_S

(25)は(26)の様な変化を意味するが、これは、*get* と比較すると、変化前状態と変化後状態、Givón 流に言えば time-axis presupposition と implication が全く逆になっている。これは、状態変化動詞とその反対動詞に顕著にみられる現象である。従って、(27)のような構造で両者の記述も可能となる。

(27)



get, *lose* の構造的類似性は(27)でも明らかで、その変化前後状態を構成する内容が逆になっているだけで、状態変化を示すことには変りがない。この場合の $\neg \text{HAVE}(x, y)$ は、 $\text{NOT}(\text{HAVE}(x, y))$ を表わしている。

3.4. 変化の要因

状態変化を考える場合、その変化の直接的或いは間接的原因となるもの、若しくはその変化に責を負うものも考慮に入れる必要があろう。Kimball は、(2) the sauce thickened を simple inchoative form としている。即ち、単に状態変化のみを述べていて、その因果関係についてはふれていないという意味で ‘simple’ であり、状態変化の記述は基本的には因果関係の記述に関係なく、最低限変化前状態と変化後状態という対照関係と変化そのものの指示により記述できると考える。

(28) The sauce thickened with heat.

(29) The heat thickened the sauce.

(30) [[The sauce NOT HAVE the thickness]_S INCHOATIVE [the

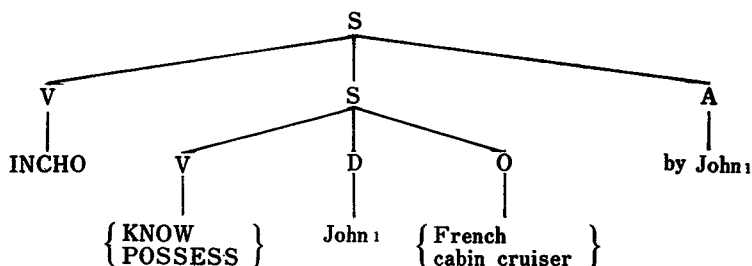
sauce HAVE the thickness]_S]_S with heat

- (31) The heat CAUSATIVE [[the sauce NOT HAVE the thickness]_S
INCHOATIVE [the sauce HAVE the thickness]_S]_S

(28)の *thicken* は自動詞、(29)は他動詞でありそれぞれ(30)(31)の構造をもつと概記できよう。両者は(2)と同様 INCHOATIVE を含んでいるが、後者では更に高次の predicate CAUSATIVE をも含んでいる。どちらの場合も状態変化という概念を含んでいることには変わりがないが、(29)の場合それはあくまで二義的なものである。(28)は、simple inchoative sentence にその要因に関する情報が付加された complex なものとなる。従って、変化の原因についての言及は、必要に応じて markedly に扱われる。

Lee (1973) では、(21)(22)の agentive reading の場合に、(32)の様な構造分析をしている。

(32)



ここで注目すべき点は、*John* が埋め込まれた文で Dative として、同時に母型文で Agentive として、都合二度基底構造に現れていることである。つまり、(32)では、変化を被る者と変化の責を負う者が同一となっている。この様な現象は、動詞の意味と文の焦点とも関りがあると考えられる。⁽¹³⁾

3.5. BE

先に変化前後状態を記述する elementary predicate として HAVE を選んだが、更に location や position の変化を記述するのに BE が必要であろう。この場合は、主に Leech (1971)⁽¹⁴⁾ のいう ‘transitional event verbs’ に相当する。

(33) John is in the room.

(34) John entered the room.

(35) [[John NOT BE in the room]_s INCHOATIVE [John BE in the room]_s]_s under John's agency

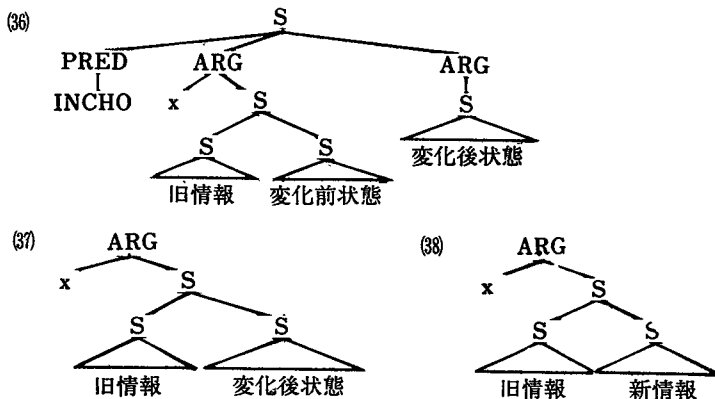
(34)は(35)の様な変化を示し、(33)はその変化後状態に相当する。しかしこの場合、状態変化を具現するためには *John* の肉体運動が必要となり、いわば Agentive な要因を付加した complex inchoative sentence とでも呼ぶべきものであろう。

4. おわりに

状態変化の指示という機能をもつ elementary predicate INCHOATIVE を導入して、状態変化動詞の意味構造を考えてきたが、ここでもう一度強調しておかなければならないのは、聴者の意識内でおこなわれた修正と考え、その修正がどの様に具現されるのかを考えた事である。都合の良いことに、状態変化の動詞が表現する状態変化が、ここでいう聴者の意識変化に対応しているので、変化ということが明示できたのである。勿論、他の動詞においても、その表わす活動前後の状態があり、しかも対立を示すが、この場合は直接意味構造に含まれているというのではなく、むしろ⁽¹⁵⁾もっと pragmatic なものであろう。即ち、現実界が連続体である限り、この様な対立即ち点の前後に線があることは当然予想される事である。しかしながら、ここで扱った変化前後状態は、動詞の意味構造そのものに含まれたもので、その様な状態とは、いわば specificity の度が異なるといえよう。

INCHOATIVE 構造は、INCHOATIVE predicate と2つの arguments から構成される。第1 argument は、assertion 前の identifying structure 即ち旧情報と変化前状態から成る α についての presuppositions を示している。この内、前者は修正をうけず、後者のみが修正されることとなる。第2 argument は、assertion によりもたらされる新情報である変化後状態を表わす。そして、INCHOATIVE predicate は、第2 argument の変化後状態を第1 argument の変化前状態の所に代入する機能を持ち、

その結果、聴者の意識に x についての新しい記述をもたらすこととなる。そして x についての更なる発話が 続く場合は、その新しい記述は今度は旧情報の一部として機能する。この様にして知識の蓄積が行われる。この INCHOATIVE 構造の一般形では、様々な 対立関係が明示されている。例えば、変化前状態と変化後状態、旧情報と新情報、presupposition と assertion 等で、これらの対立関係が明示されてこそ、状態変化という概念の明示も可能となる。そして、その基礎となる状態を記述する elementary predicate として HAVE や BE が考えられる。結局、状態変化動詞の意味構造の一般形は、(36)の様に 概記できよう。そして、INCHOATIVE の働きに依り、聴者の意識に新しい identifying structure (37)が獲得される。変化後状態は新情報に他ならないので、(37)はまた(38)となる。(38)は、まさに



communication の効果、即ち旧情報に新情報を付加することを示している。更には、単に新情報のみを伝える様な場合は、旧情報量を零として処理する可能性も示唆している。少なくとも (36) は変化の機能を担う INCHOATIVE predicate を含む状態変化動詞の意味構造であるといえよう。しかも、simple inchoative sentence type であり、これに変化の要因等についての情報が付加されていく。

- (39) Max believes that George was right. (stative sentence)
 (40) Max became convinced that George was right.
 (simple inchoative sentence)
 (41) Max became convinced that George was right by Otto's persua-

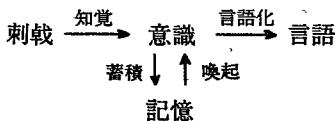
sion. (complex inchoative sentence)

- (42) Otto persuaded Max that George was right.
(causative sentence)

(39)は(40)(41)の基底構造に変化後状態として埋め込まれている。更に(42)の基底構造には(40)が含まれていて、(41)がその中間的なものと考えられる。このことは、より深い意味での動詞の意味 state, process, action の階層性⁽¹⁶⁾を示し、更にこの階層性が動詞の意味構造内でも構造化されている事を示唆している。

[注]

- (1) 「一定の事物について述べる」と「全く新しい事を述べる」と二種の communication のタイプが考えられるが、ここでは前者を扱う。
(2) Öim, Haldur (1973), "On the Semantic Treatment of Predicative Expressions," *Generative Grammar in Europe*.
(3) この様な表層表示ではなく、聴者の記憶での最終表示への逆行する形は、Chafe にも見られると成田(英語青年1975年10月号)で紹介されている。「意識」と「言語」の間に意味構造が存在すると考えられる。



- (4) 加藤主税(1974), 「動詞の意味構造について——状態変化と意味——」, *OLR*.
(5) 変化そのものにも、suddenly だけでなく gradually 等の時間を要する場合もある。
(6) Lakoff, George (1968), "Some Verbs of Change and Causation," *NSF*.
_____ (1970), *Irregularity in Syntax*.
(7) Kimball, John (1973), "Get," *Syntax and Semantics*.
(8) Anderson, Tommy R. (1968), "On the Transparency of Begin: Some Uses of Semantic Theory," *FL*.
(9) Givón, Talmy (1973), "The Time-Axis Phenomenon," *L*.

- (10) ここで扱う INCHOATIVE は、Charleston のいう aspectual な inchoative verb というよりは、もう少し広い意味での変化を担うとする。
- (11) Lee, David A. (1973), “*Stative and Case Grammar*,” *FL*.
- (12) Fillmore, Charles J. (1968), “*Lexical Entries for Verbs*,” *FL*.
- (13) (a) Carol got a book for her mother. (agentive)
(b) Carol got a book from her mother. (nonagentive)
(a)(b)の動詞そのものの意味の違いにも留意すべきで、(a)は *Carol* 自身の行為、(b)は状態変化を示す。これには、Jackendoff のいう thematic relation からの説明も一策であろう。
- (14) Leech, Geoffrey N. (1971), *Meaning and the English Verb*.
- (15) Ōim は、状態変化の動詞でないものに、performative analysis を行って、変化前後状態の対立を試みているが、本論でとり扱ったのとは基本的な考え方は同じでも specificity の段階で違うのは明白であろう。
(a) John is walking.
(b) I say to you about John, of whom you don't know that he is walking, that he is walking.
- (16) Jespersen, Otto (1924), *The Philosophy of Grammar*.